

## 馬瀬狂言資料の紹介(11)

——「今神明」について——

山本晶子

はじめに

「今神明」は、和泉流固有の曲と言ってよいもの一つであろう。大蔵流では虎明本にしか見えず(現行曲の「栗隈神明」は明治以後に本曲を改作したもの)、鷺流での伝承も認められない。そして和泉流でも、橋本朝生氏の「狂言台本・曲目所在一覽補遺」<sup>1</sup>に拠れば、天理本以下全て合わせても一本と、伝えられた台本の数は多くない。<sup>2</sup> 本曲は、商いがなかなかうまくいかない都の夫婦が、宇治に神明が降ったことで、その場所を訪れる参詣客相手に、茶屋商いを始める話である。本曲を所収した台本が馬瀬狂言に伝わっており、その内容が明らかに和泉流のものと同認められることから、これまでの台本に加えられるべき新資料として本稿で取り上げ、その位置づけを報告する。

本曲に関する先行研究としては、橋本朝生氏が「狂言と茶」<sup>3</sup>の中で、荷茶屋が登場する曲として言及されているが、諸本の展開に関する報告はなされていないことから、その点も確認した上で馬瀬文化二年本の位置づけを明らかにする。

### 一、「今神明」の展開

馬瀬狂言の「今神明」の台本は、前稿で紹介した馬瀬文化二年本に収められているもののみである。また馬瀬狂言の上演記録において、「今神明」の上演は確認できない。しかし上演記録には認められなくても現在上演されている「佐渡狐」の例があることから、上演の可能性が全くないとは言えないだろう。

この馬瀬文化二年本の「今神明」の位置づけを調べるため、まず「今神明」の和泉流諸本の系統について述べることにする。本曲の場面展開について大まかな流れをまとめたのが表1である。表1で取り上げた諸本は、天理本以下、資料の内容確認ができたものである。<sup>6</sup> 先述の「狂言台本・曲目所在一覽補遺」の名称・成立順に則り示した(諸本において該当する場面の有無を○・×で示した)。これによれば、本曲は大きく三つの系統に分かれることが認められる。天理本をはじめとするグループ、和泉家古本をはじめとするグループ、そして他本と異なる展開を有する和泉流密書である。

まず各グループの違いが認められるのは、夫婦が開いた茶屋を訪れる参

表1 「今神明」の諸本の展開

		馬瀬 文化 二年本	天理 本	和泉家 古本	波形 本	和泉流 宗家 系狂言 本	雲形 本	狂言 集成	和泉流 (古川) 八十番 本	和泉流 密書
1	シテ（茶屋）の名乗	○	○	○	○	○	○	○	○	○
2	シテが女を呼び出す	○	○	○	○	○	○	○	○	×
3	シテは女に、商いがうまくいかないので、参詣がてら宇治へ行って、新たな商いをするを提案する	○	○	○	○	○	○	○	○	×
4	シテは女に、新たな商いとして、茶屋を始めること、道具は揃えたことを話し、準備をして出発する	○	○	○	○	○	○	○	○	×
5	宇治への道行	○	○	○	○	○	○	○	○	○
6	茶屋の準備	○	○	○	○	○	○	○	○	○
7	一人の参詣人の登場・道行	×	○	×	×	×	○	○	×	×
8	シテは参詣人に声をかけ、茶を出すのが、参詣人は茶に不満を述べて去る	×	○	×	×	×	○	○	×	×
9	シテは客を逃した理由を語り、今度の客に油断しないよう、女に命じる	×	○	×	×	×	○	○	×	×
10	複数の参詣人の登場	○	○	○	○	○	○	○	○	○
11	シテは参詣人一行を迎え、女は茶を出すのが、客はそれぞれ不満を述べて、別の店に行くことを提案する	○	○	○	○	○	○	○	○	○
12	茶代を払わずに店を出る参詣人一行に対して、シテは何とか代金をもらおうとするが、突き倒される	○	×	○	○	○	○	×	○	×
13	参詣人一行は茶屋の対応の悪さを口々に言い立て去る	○	○	○	○	○	○	○	○	×
14	客が去り、夫婦は慰め合って都に戻る	○	○	○	○	○	○	○	○	×
15	切謡	×	○	○	○	×	○	○	○	○

詣人が一組か二組かという点である。和泉流最古本の天理本は二組の参詣人が登場する。この流れを有するのは、雲形本、狂言集成である。一方、登場する参詣人一行が二組のみであるのが、和泉家古本、波形本、和泉流宗家系狂言本、和泉流八十番本、和泉流密書（以下、宗家系本、古川八十番本、密書と略す）となる。更に他とは異なる展開を持つ密書の詳細については後述する。

こうした和泉流諸本の内容を基に、馬瀬文化二年本の展開を確認すると、表中に網掛けで示した通り、和泉家古本をはじめとするグループに含まれることがわかる。この中でも項目全てが一致するのは宗家系本である。この両本を比較すると、曲の展開だけでなく、詞章の面においてもどの本よりも近い関係であることが明らかになった。そこで諸本の展開の違い（その具体例と本毎の特徴も含め）について、各グループ毎に示しながら、馬瀬文化二年本・宗家系本の関係について考察する。

#### （一）参詣人が一組（和泉家古本系）のグループの展開

和泉家古本以下の波形本、宗家系本、古川八十番本、馬瀬文化二年本では、以下の展開となる。

- 1 シテ（茶屋）の名乗
- 2 シテが女を呼び出す
- 3 シテは女に、商いがうまくいかないのので、参詣がてら宇治へ行って、新たな商いをすることを提案する
- 4 シテは女に、新たな商いとして、茶屋を始めること、道具は揃えたことを話し、準備をして出発する
- 5 宇治への道行

#### 6 茶屋の準備

（7～9はナシ）

- 10 複数の参詣人の登場
- 11 シテは参詣人一行を迎え、女は茶を出す、客はそれぞれ不満を述べて、別の店に行くことを提案する
- 12 茶代を払わずに店を出る参詣人一行に対して、シテは何とか代金をもらおうとするが、突き倒される
- 13 参詣人一行は茶屋の対応の悪さを口々に言い立て去る
- 14 客が去り、夫婦は慰め合って都に戻る
- 15 切謡

和泉家古本は、先述した通り、一組の参詣人一行が茶屋を訪れる設定となっている。二組の参詣人が登場する天理本系に比べると、より簡潔な形にしたものと言える。この和泉家古本の詞章に最も近いのが古川八十番本<sup>7</sup>であり、和泉家古本の詞章（記載を省略した箇所等）をより整えたところが認められるのが宗家系本である。一方、波形本は一組の参詣人一行が茶屋を訪れるという点は共通しているが、他本と異なる点指摘できる。そこで各本の違いが明確である、参詣人一行に茶の代金を求める場面12の詞章を掲げて確認する。

シテが茶の代金を払わぬ参詣人に対して更に催促をすると、立衆はシテを突き退け、悪口を言いながらその場を去る流れとなる。

（本文の引用の場合、台本名は以下の形で示す。天理本…天理 和泉家古本…和泉 波形本…波形 宗家系本…宗家 雲形本…雲形 狂言集成…集成 古川八十番本…八十 和泉流密書…密書 馬瀬文化二年本…馬瀬）

和古 シテ「茶屋の茶をのふて・茶かわりをおかぬと云事かある物かト云テ・立テセツク

頭「にくいやつト云テ・シテヲツキノケテ・扱立衆ノク

宗家 シ「茶屋の茶をのふて、代りをおかぬと言事か有てござるか。何れも代りをおくさせられいト云テサイソクスル

立「扱にくるやつト云テシテヲツキノケテ

八十 「茶屋の茶を呑て茶代を置ぬと云事かあるものか。早ふ置て行せられ。扱

く憎やつト云テシテツキノケテ立衆ノク

馬瀬 (シテ)「茶屋の茶を呑ふて、代りをとらずに居らるゝものか。

(立頭)「さアくおくさせられい。立頭へ取つく。(立頭)「扱にくいやつ。シテヲコカス。(※傍線・破線は稿者が付す。以下同じ)

これらの詞章を比較すると、傍線部の例のように、表現に若干の異なりがあるが、同じ系統と言えよう。この中で和泉家古本との関係を見ると、先述の通り、古川八十番本が最も近い詞章で、以下宗家系本、馬瀬文化二年本の順になるものと考えられる。中でも馬瀬文化二年本と宗家系本は、破線部のように共通する表現が認められ、両者の関係の近さがわかる。この点についての詳細は後述する。

一方波形本では、他本でシテが参詣人に代金を取り立てるところが、シテではなく女が代金を払わないことで客に詰め寄り、参詣人は女を突き倒す形となる。

女\のふく茶をのふて茶替もおかずにのみにげをさせうてか。衆\おのれハにくいやつ、なんの茶をのみにけせう。すいさんな事を云ト女ヲツキタヲス

それを見たシテが立頭に詰め寄り、逆に夫婦共に立衆に乱暴される。

シテ\ア、是くそなた衆ハ茶をのふて茶替りをおかぬのみならず、女を打こかいて茶をのふてかわりをおかぬハ盗人といふ物じや。頭\なんじや盗人じや。衆\物をいわざわざらるゝ、がよつてふませられいト寄つてタ、キフム

諸本の表現が「ツキタヲス」「ツキノケテ」といった形であるのに対し、傍線部の通り、女を「ツキタヲス」、シテを「タ、キフム」という表現で、より乱暴の程度が増し、茶碗も割れ、その場を去る立衆をシテが追いかける場面が続く。こうした過酷な状況を描いているので、この後に続く場面で、他本が女の対応の悪さをシテが非難する形であるのに対し、波形本では夫婦揃って不仕合わせであることを確認するだけとなる。更に波形本の特徴的な場面として、場面6の茶屋の場所を選んでいる最中に、多くの参詣客があることを確認し、茶屋が繁盛することを願って神明に拝してから、その後茶屋の場所を定める。

茶ミセヲシテ柱ノ先ニ置、ヲガム

参詣客の多さを口にする場面は諸本に認められるが、拝むという演技を加えた演出は、その後の結末をより際立たせるねらいがあるのではないかと。夫婦にとって、不仕合わせが度重なることを強調して示していると言えよう。このように、波形本が独自の演出を見せる点については、すでに雲形本研究会で指摘されているところであり、それが「今神明」でも確認された。

## (2) 参詣人が二組(天理本系)のグループの展開

先述の通り、参詣人が二組登場する展開を持つものは、天理本その他、雲形本と狂言集成である。前半の展開は、密書を除くいずれの本でも共通しているが、各本で特徴的な詞章を掲げると、まず雲形本では、場面3の夫婦が仕合わせが悪いことを語り合う箇所、女が商売がうまくいかない理由を、

女\わらはもさうはおもひますれ共、身上のならぬも前世の事でござれば、  
何と致さう様もござらぬ

傍線部の通り「前世」からと説明する。

一方、狂言集成では、場面5の宇治への道行で、シテが茶を売るための心構えを女に教える詞章がある。

さて。総じて此の茶を売るは。茶立女と云ふ者が気を働かしてさべらねばならぬ。人が夫婦ぢやと思へば、遠慮して物も云はぬ程に。そなたは茶立女になつて。身共は連合ひの様におしやるな。

このように茶立女としての振る舞い方を説く場面を設けることで、その後、参詣人に対する女の対応が臨機応変なものではなく、最終的に女が「不調法」であったため、茶屋商いが不首尾に終わるといふ流れを理解しやすくしている。

後半の場面7以降の展開について掲げると、以下の通りである。これら三本の中で、後半の展開に違いが認められるのが、場面12である。

### 7 一人の参詣人の登場・道行

8 シテは参詣人に声をかけ、茶を出す、参詣人は茶に不満を述べて

去る

9 シテは客を逃した理由を語り、今度の客に油断しないよう、女に命じる

10 複数の参詣人の登場

11 シテは参詣人一行を迎え、女は茶を出す、客はそれぞれ不満を述べて、別の店に行くことを提案する

12 【雲形本のみ】茶代を払わずに店を出る参詣人一行に対して、シテは何とか代金をもらおうとするが、突き倒される

13 参詣人一行は茶屋の対応の悪さを口々に言い立て去る

14 客が去り、夫婦は慰め合つて都に戻る

15 切謡

雲形本は、和泉家古本をはじめとするグループと同様に、茶の代金を参詣人一行に請求する。先の(1)に掲げた場面12の詞章に該当するところは以下の通りである。

シテ\ (前略) 茶屋の茶をのうで、茶代をおかぬといふ事が有物か。さあく早うおこさせられ 女\ さあくどなたも茶代を下され 四\ あの様な者にはかまはせらるゝな (中略) シテ\ (跡ヨリ、追テ行、頭取ヲ、トラヘ留) 茶代をとらねバやる事はならぬ 女\ のおく、最早よしにさせられ。(中略) 頭\ ぬくどい。やる事はならぬといふに。(ト云ナガラ、シテヲ、ツキタフシ、入ル也)

先に示した諸本に比べ、詞章を丁寧に記載している。この中で女も参詣人に対して茶代を請求するところは、波形本にも通じると言えようか。その他、参詣人一行に茶を出す場面においても、茶店の見事さや神明の場所を尋ね

る問答がある。雲形本研究会で指摘されたせりふが長大であること、演出・型付けに関しても詳しいとされる雲形本の特徴が本曲でも確認できる。

また狂言集成は、雲形本とは対照的に詞章が簡潔であるが、特徴的な場面としては、先述の場面5の道行や、場面14にシテが茶碗をよく濯がないことで女を叱ると、女は、

でも唯一つならではない茶碗が。何となりまする。

など、貧しさ故に茶道具が調わないことを示す詞章などが他本よりも多く認められる。終曲部では、夫婦共に「泣く」演技が加わり、不仕合せな状況が変わらない、そのやるせなさを表す演出となっている。なおこの泣く演技については、馬瀬文化二年本の終曲部にも記されている。この部分的な両本の共通性について、現段階では明らかにしえないが、三宅派の詞章を取り入れた曲が馬瀬狂言資料に認められるので、今後の課題とする。

### (3) 和泉流密書の展開

最後に、他本と異なる特徴が認められる密書の展開について言及する。

後半にも異なる箇所があることから、密書の展開はアルファベットで示し、対応する他本の展開を( )で示した。

- A (1) シテ(茶屋)の名乗
- B (5) 宇治への道行
- C (6) 茶屋の準備(シテと女の問答は記載ナシ)
- D (10) 複数の参詣人の登場
- E (11) シテは参詣人一行を迎え、女は茶を出す、茶屋の対応の悪さを口々に言い立てる

F シテは参詣人が宇治の衆ならば吞まないのも道理だと納得する

G 客が去り、夫婦は宇治の地で商いをしたことを悔やむ

H (15) 切謡

I シテが女を突き倒し、女は腹立ち、シテを追い込む

密書では、シテが曲の冒頭から荷茶屋を担いで、女と共に登場し、次第、名乗の後、道行となるため、諸本にある2〜4の女と相談する場面がない。

煎物ノ如ク荷ヲ茶ヤカタケテ出ル。女ニケワイサセ、サキニ立テ相向テ、次第道行。茶荷ヲカタケナカラウタフナリ。名乗ノ時茶荷ヲシテ柱ノ元ニヨロス也。

右に掲げたト書きと共通するものが、大蔵虎明本に認められる。

せんじ物のことく、になひぢや屋をかたげ、女をけはせて、さきへたて、あひむかふて、しだい道行をうたふうちは、ぢや屋をかたげながらうたふ、名のりの時ばかり、ぢや屋を、してばしらにおろし、なのるなり

その後の道行として謡われるのが、

住馴し都の内を立出て、く、木幡山路を打過て、宇治の中橋打渡り、神明山に着にけり

で、これも大蔵虎明本の、

へ住なれし都のうちを立出て、く、こわた山路を打過て、うちのなかはしうちわたり、神明山に着にけり

と一致する。またここまでの展開は大蔵流「栗隈神明」(茂山真一本)の冒頭の次第、名乗、道行と続く形とも共通し、特に道行の詞章の、

「汲む水の、清き心も曇りなき、清き心も曇りなき、月を伏見の道続く、木幡山路をあとに見て、宇治の長橋うち渡り、神明山に着きにけり。

にも類似する表現が認められる。

ここに示した通り、密書と大蔵虎明本とは共通する内容<sup>10</sup>であることがわかる。この本の特徴としては、その後の展開で茶屋に立ち寄った立衆がはじめから、

女程お、ひ物ハ御座らぬが、あの女程みめのわるひむさい女ハ見た事か御座らぬ。(中略)惣而茶屋杯といふ物ハ、きれる成女などがたて、こそ茶も吞れもせふが、あの様な女の立た茶ハ吞れハ致まい

と茶の悪口に先立って、妻に対する悪口がある。その後、茶を吞まない立衆に対して、シテ自身が、

いやそなた衆ハ宇治の衆じやと見へた。此様な茶ハえまいるまい

と、自分の出した茶を「丹波茶のわるひ茶を吞れもとおりじや」と納得し、茶代を請求する場面はない。この宇治という場が茶屋商いをするのに適さないとする詞章は、雲形本にも見え、終曲部の添書にある、

其上此宇治の里ハ、茶の名物ぢや。夫に茶を持て来てあきなふと云ハ、身共が無分別ぢや

とする発想に通じるものである。そして、そのままキリの謡となり、最後

に、

女ヲツキコカシ、女腹ヲ立テ(中略)茶荷ノ棒ヲトリ追込也

女がシテを追込む形で終曲となる。<sup>11</sup>和泉流本来の筋立てをより簡潔な構成に仕立て、茶屋がうまくいかない理由に女性の容貌と、茶所としての宇治という土地柄を掲げ、最後に夫婦げんかで幕を引くという流れでまとめている。

このように和泉流「今神明」の伝本は、大筋の展開は共通しているものの、細部の描き方や演出に違いがある。特に不仕合わせとなる理由をどのように描くのかによって、曲趣も変わる曲と言えるのではないか。

## 二、馬瀬文化二年本と宗家系本との関わり

次に、馬瀬文化二年本の位置づけを考える上で、近い関係にある本として認められるのが、宗家系本である。そこで改めて両本の詞章の異同をまとめたものが表2である(紙数の都合で、仮名遣い・表記・清濁の違いは示さなかった)。表中には更に、両本の異同の箇所<sup>a</sup>に該当する和泉家古本の詞章を示し、その関係について左記の記号で表した。

■…和泉家古本と宗家系本の詞章が一致するもの

□…和泉家古本と宗家系本の詞章が近似するもの

●…和泉家古本と馬瀬文化二年本の詞章が一致するもの

○…和泉家古本と馬瀬文化二年本の詞章が近似するもの

まず馬瀬文化二年本と宗家系本の異同について確認する。異同が認められた箇所は合計一三四あり、その内訳を見ると、

a 該当する語句がない、

表2 馬瀬文化二年本と和泉流宗家系本との異同

【記号】■…宗家系本と一致／□…宗家系本に近似  
●…馬瀬文化二年本と一致／○…馬瀬文化二年本に近似

	異同 内訳	馬瀬文化二年本	和泉流宗家系本	和泉家古本	両本の 一致度
1	a	真中ニテ名乗	ナシ	ナシ	■
2	e	居住	住居	すまひ	■
3	b	不仕合御さる	仕合か悪ふて身上ならぬ	仕合かわるふて身上罷ならぬ	■
4	e	此比	比日(ママ)	此比	●
5	a	ナシ	中々	中〜	■
6	c	賑々敷	賑々敷事じゃ	ナシ	
7	c	宇治茶商ひ	宇治商(ママ)をなり共	あきなひをも	
8	d	女共を	女共	女しやものを	
9	d	相談	相談を	談合を	
10	e	是の人居さしまするか〜 心得ました	呼出し女出ル。如常。ガクヤヨ リシカ〜	ヨヒ出ス 女「何事で御さるそト云 テ・楽屋ヨリ出ル〜シカ〜	□
11	a	ナシ	そなたを呼出す	ナシ	●
12	b	二人ともに	そなたも身共も	そなたも身共も	■
13	a	ナシ	随分	すいふん	■
14	c	不仕合な	不仕合て身上かならぬ	身上かならぬ	□
15	d	おもわしまするそ	思わします	おもわしますそ	
16	d	さふ	左右ハ	さうは	■
17	d	何と	何とも	何と	●
18	b	仕ふ様	致様	いたさうやう	■
19	d	つき	付て	ついて	■
20	b	此比ハ	此程	此程	■
21	c	夫婦つれて	連て	めうとつれて	●
22	a	ナシ	程に	程に	■
23	a	ナシ	何そ	なんそ	■
24	b	商ひをして行ふと	商を行ふかと	あきないをせまひかと	
25	d	思ふか	思ふ	ナシ	
26	d	おくりやろふか	おくりやるまいか	たもらうか	
27	d	童も往て	わらハかいて	わらはかいて	■
28	e	なれハ	ならバ	ならは	■
29	b	某の	身共が	身共か	■
30	d	余の事	余のことは	余の事は	■
31	d	ならふ(ママ)によつて	ならぬによつて	なるまひ程に	
32	d	茶を商ふと	茶を商ふかと	茶屋をせうかと	
33	c	思ふ事しや	思ふ	思ふ	■
34	b	さしまするな	おしやるな	ナシ	
35	b	せひとも	善悪	せんあく	■
36	b	なふ追付	左右あらバ	ナシ	
37	b	仕ふほとに	せう	ナシ	
38	a	心得ました	シカ〜	ナシ	
39	e	脇座ニ立ツ。荷をシテ柱ノ向 直ス。シテ楽屋へ荷を取ニ行	シテカクヤへ入。女ワキニ立イル。 ガクヤヨリ持出、シテ柱ノ先ニヨク	シテ「其時楽屋へ入・ニナヒ茶 屋ヲ持テ出ル	
40	b	行ませふそ	さらハ行ふ	さらはゆかふ	■
41	e	是ハきれいに	奇麗に是ハ	是は見事に	
42	a	心得ました	ナシ	ナシ	■
43	a	ナシ	笠ハガクヤヨリシテ持出ル	右ノ笠ハ楽屋ヨリ・シテ持テ出ル也	□
44	d	そなた	そなたハ	ナシ	

※網掛け箇所は和泉家古本の表現と一致、または近似の箇所



	異同 内訳	馬瀬文化二年本	和泉流宗家系本	和泉家古本	両本の 一致度
45	b	ゆかしませ	おゆきやれ	ナシ	
46	d	事ておりやる	事じや	ナシ	
47	a	夫ハ	ナシ	ナシ	■
48	d	気遣さしまするな	気遣ひさせらるゝな	ナシ	
49	d	御さろふそ	こさろふとて	ナシ	
50	a	イヤ	ナシ	ナシ	■
51	d	宇治へ	宇治に	ナシ	
52	b	誠に宇治しや	其通りじや	ナシ	
53	a	聞たよりハ	ナシ	ナシ	■
54	d	事しやなふ	事じや	ナシ	
55	a	其通て御座る	ナシ	ナシ	■
56	b	とこ元かよかろふそ	とこにせふぞ	ナシ	
57	a	いや	ナシ	ナシ	■
58	b	是か	爰元が	爰元か	■
59	a	是へよらしませ。「心得ました	ナシ	ナシ	■
60	b	脇座ニ荷を置	ト云テワキニ荷茶ヲ置	脇ノ居座ニニナイ茶屋ヲオロイテ	
61	b	笠ニツ棒ニかけておく	笠ニカイトモニ棒ニカケ置	二人共ニ笠ヲヌキ・ニナイ茶屋 ノ棒ニカケテ置	
62	b	女上ニ居ル	女ヲ上ノ方ニヨク	女上ヲ(ママ)方ニ置也	□
63	a	シテ下ニ居ル	ナシ	ナシ	■
64	a	外名乗	ナシ	ナシ	■
65	e	此比	比日(ママ)	ナシ	
66	c	願事ハ何にても	願を何にても	何にてもねかひか	□
67	d	同道いたし	同道致て	ナシ	
68	b	参詣いたそふ	参らふ	参らう	■
69	a	ナシ	何れも	ナシ	●
70	a	是におります	ナシ	ナシ	■
71	e	右之通言。「一段とよ(ママ) 御座ろふ	ト云テカクヤヲムキ呼出ニ、立衆 出ル。次第同道	立衆ヲヨヒ出シ同道シテ行・常 ノコトク也	
72	b	来さしませ	ござれ	ナシ	
73	e	心得ました	シカ〜 右ノ如ク云、一返廻 ル内ニミ付テ詞ヲカクル也	ナシ	
74	b	とはせらるゝハ	ふらせらるゝと申ハ	ナシ	
75	a	其通て御座る	シカ〜	ナシ	
76	b	何事によらず願事か叶ふと	願事ハ何にても叶せらるゝと	ナシ	
77	c	申事て御座る	申て夥敷参詣じやと申	ナシ	
78	a	仰らるゝ、通り有難い事て 御座る	シカ〜	ナシ	
79	b	いさ	イヤ	ナシ	
80	b	ある	居る	ナシ	
81	d	のみませふか	のみますまいか	のみふ	
82	a	一段とよふ御座ろふ	シカ〜	ナシ	
83	d	のみませふ	のみふぞ	ナシ	
84	d	心得ました	こゝろへた	ナシ	
85	a	ナシ	各下ニ居	ナシ	●
86	a	茶ヲ立テ皆々立衆へ指出ス	ナシ	ナシ	■
87	c	皆々へ呑ス	云テ皆へ呑ス	ト云テタツル	
88	a	ナシ	タテ茶也	ナシ	●
89	c	一口ツ、呑ふてわる口言ふ	一口ノウテ	一口ノフテ	■
90	c	是はわるい茶て御座る	茶かわるい	ちやかわるいに	□
91	a	其通て御座る	ナシ	ナシ	■

	異同 内訳	馬瀬文化二年本	和泉流宗家系本	和泉家古本	両本の 一致度
92	d	其上ぬるふてのまれませぬ	其上ぬるふて吞れぬ	ぬるうてのまれぬ	<input type="checkbox"/>
93	b	扱ゝわるい茶て御座る	茶椀がむさい	ちやわんかむさい	<input checked="" type="checkbox"/>
94	a	ナシ	ナト云テ二三人一フクツ、吞也	ナト、云テ・立衆二三人一フクツ、ノム也	<input type="checkbox"/>
95	b	シテ右ノ言ヲ聞テ氣ノトクカル	其内シテキノドクカリ	ナシ	
96	c	茶下ヲあおく	茶ノ下ヲアヲキナトシテ	ナシ	
97	a	ナシ	立内ヨリ	ナシ	<input checked="" type="checkbox"/>
98	d	是はかり	是計か	是はかりか	<input checked="" type="checkbox"/>
99	d	茶屋てハ	茶屋ても	茶屋か	
100	a	ナシ	又	ナシ	<input checked="" type="checkbox"/>
101	a	よふ御座らふ。さア〜来 さしませ。心得ました	シカ〜アリ	ナシ	
102	b	何レモ立ツ	散々悪口云立ツ	尤ト云テ立	
103	b	是々何レも	なふ	なふ〜	<input type="checkbox"/>
104	d	茶かわり	茶の代り	茶かわり	<input checked="" type="checkbox"/>
105	b	おかしませ	出かしませ	おかせられい	<input type="checkbox"/>
106	b	やらるゝ	おかるゝ	おかるゝ	<input checked="" type="checkbox"/>
107	b	とらずに居らるゝものか	おかぬと云事か有てござるか	おかぬと云事かある物か	<input type="checkbox"/>
108	b	さア〜	何れも代りを	ナシ	
109	b	立頭へ取つく	ト云テサイソクスル	立テセツク	
110	c	シテヲコカス	ト云テシテヲツキコカス	ト云テ・シテヲツキノケテ・扱立衆ノク	
111	a	又	ナシ	ナシ	<input checked="" type="checkbox"/>
112	b	行ませふ	参ろふ	ナシ	
113	b	来さしませ	こされ	ナシ	
114	a	心得ました	シカ〜立衆入	其内シカ〜有ヘシ	
115	c	女シテヲヲコス	(怪我ハさせられぬか) ト云テ 女引ヲコス	ナシ	
116	d	あふなやのふ〜	あぶない	ナシ	
117	b	何として	なせに	なせに	<input checked="" type="checkbox"/>
118	d	茶椀も	茶椀を	茶わんを	<input checked="" type="checkbox"/>
119	b	して置ぬ	洗ぬそ	あらわぬそ	<input checked="" type="checkbox"/>
120	a	其上	ナシ	ナシ	<input checked="" type="checkbox"/>
121	b	成た故	立るに仍て	たつるによつて	<input checked="" type="checkbox"/>
122	a	ナシ	女ヲシカル	女ヲシカル	<input checked="" type="checkbox"/>
123	a	大切ニ	ナシ	ナシ	<input checked="" type="checkbox"/>
124	d	せいを	精に	せいに	<input checked="" type="checkbox"/>
125	d	仕合の	仕合か	仕合か	<input checked="" type="checkbox"/>
126	a	ナク	ナシ	ナシ	<input checked="" type="checkbox"/>
127	b	御主のおいやる	お主かいふ	おぬしか言	<input checked="" type="checkbox"/>
128	b	とかく	何に付ても	何事につけても	<input type="checkbox"/>
129	b	不仕合ゆへしや	仕合かわるさじや	仕合かわるいによつてしや	<input type="checkbox"/>
130	a	登ふ	ナシ	いなふ	
131	c	いさ此躰を	を	此ていを	<input type="checkbox"/>
132	c	謡ふ	諷ふて行まいか	うたふていなふ	
133	b	ともかくもさせられい	一段とようござらふ	ナシ	
134	a	ナシ	ウタテノタヒ人達ヲ諷、此茶ヲステ、 テト云トキホウロクヲワツテ留ル。 シ「いとしの人や、ちやつとささし ませ〜。又荷ヒ茶ヤヲカタケ仕 舞アツテガクヤへ荷入モアリ。女茶 立ル内、男シヨウアルヘシ (以下 装束付略)	うたてしの旅人たちやヲ云テ一此茶 屋をすて〜と云時・ホウロクヲ打ワツ テ・女ヲオウテ入ル也「又オワス ニ入モアリ「又ニナイ茶ヤヲカタ ケ・仕舞有テ楽屋ヘニナフテ入ル 様モ有ヘシ「但・右女茶ヲツル 内ニ・男仕様有ヘシ	<input type="checkbox"/>

または「シカく」として記載されないもの…三八

(馬瀬文化二年本の方がナシ…一四 宗家系本の方がナシ…二四)

b 語句が言い換えられているもの…四二

c 共通する語句に表現が加えられたもの…一五

d 助詞、助動詞、補助動詞などが加えられているもの…三〇

e 上記以外のもの(語順の違い、ト書きの添加)…九  
となる。

a の具体例として、場面4のシテが荷茶屋の道具を取りに行くところ

(No.38)では、

宗家 「(前略)先夫ニ待しませ。シカく」

馬瀬 「(前略)先夫にまたしませ。「心得ました。」

と、宗家系本で明示していない箇所について、馬瀬文化二年本では示している。こうした宗家系本の方が省略(「ナシ」)する例が、馬瀬文化二年本の約二倍あることから、馬瀬文化二年本はより明確に台詞を記載しようとする姿勢が顕著であると言えようか。

b の具体例としては、場面11の参詣人一行が茶を飲み非難するところ

(No.93)で、

宗家 「茶碗がむさこ

馬瀬 「扱ゝわるい茶て御座る。

宗家系本では茶碗の批評となっている箇所が、馬瀬文化二年本では茶について

の批評に言い換えられている。  
c の具体例としては、終曲部の謡の箇所(No.132)で、

宗家 一節 謡ふて行まいか

馬瀬 一ふし謡ふ。

「謡(謡)ふ」という表現は共通ながら、宗家系本では「行まいか」を添えている。

d の具体例として、場面3の夫婦が商売がうまくいかないという問答の

場面(No.16)で、

宗家 「わらハも左右ハ思ひ舛れ共

馬瀬 「わらハもさふ思ひますれとも

このような助詞の有無が13例あり、書写の段階での脱落の可能性も考えられるものである。一方、助動詞や補助動詞の例では、場面5の宇治への道

行の最中のシテの台詞(No.46)で、

宗家 「何卒神明のお影で仕合かしたひ事じや

馬瀬 「何とそ神明の御蔭で仕合か仕たい事ておりやる。」

と、馬瀬文化二年本の表現が、宗家系本の表現よりも丁寧な形になっている例が認められる。この他にも(宗家↓馬瀬)、

72 ござれ ↓来さしませ

83 のまふぞ ↓のみませふ

84 こ、ろへた ↓心得ました

90 茶かわるい ↓是ハわるい茶て御座る

92 其上ぬるふて呑れぬ ↓其上ぬるふてのまれませぬ

といった形が散見される。いずれも話し手、聞き手に違いはない場面であるので、こうした丁寧な表現が認められることも馬瀬文化二年本の特徴としてよいのであろう。

eのその他の例としては、語順の違いとして、場面4のシテの用意した茶屋を見た女の感想として（No.41）、

宗家 「扱々奇麗に是ハ出来ました

馬瀬 「扱々是ハきれいに出来ました。

といったもので、他にト書きの内容の異なりなどもここに含めた。

こうした異同は確認されたが、他は本文が一致していることから、もっとも近い関係にあると言える。

更にこれらの異同の箇所について、和泉家古本との共通性を確認したところ、和泉家古本と一致した箇所が全体で七四箇所、その内訳は以下の通りである。

和泉家古本と宗家系本が共通、または近似する箇所

■…四九 □…一三 計 六二箇所

和泉家古本と馬瀬文化二年本が共通、または近似する箇所

●…一〇 ○…二 計 一二箇所

上記の結果により、和泉家古本と共通する箇所が多いのは、先述の通り宗家系本である。また馬瀬文化二年本には、独自に注記を加えた例も認められる（No.1、No.63等）。こうした状況から、馬瀬文化二年本には、和泉家古本の詞章を受け継ぎながら、宗家系本に比べより台本としての形を整えよ

うとする意識が窺える。先述の表現を丁寧にする傾向が認められたこともその姿勢の一環と捉えられよう。

おわりに

馬瀬文化二年本は、和泉流「今神明」の諸本の中では、和泉家古本に代表される、参詣人が一組のグループに属し、特に宗家系本に近い本文を有していることが明らかになった。この宗家系本と馬瀬文化二年本との関係について、「今神明」以外の曲についても調査を進めているが、両本にある曲は六曲（「鷹磔」「三人不仁」「飛越」「胸突」「鞍馬参」「木実論」）である。

その中で詞章が近いのは「木実論」であるが、一方異なる曲（「飛越」）もあり、調査を継続している。この本の最終丁には、「辛酉揃冬写之」という奥書があり、橋本朝生氏の「狂言台本・曲目所在一覽補遺」では、この「辛酉」が享和元年である可能性を示している。もしこの本の成立が享和であるとすると、文化の前の年号となり、両本の書写年代も近いことになる。これまで馬瀬狂言資料の傾向として、山脇派の詞章を用いながらも、筋立てや詞章を簡略化する方向が見られることを指摘してきたが、この馬瀬文化二年本には、他に明和中根本と詞章がほぼ一致する「枕物狂」や「比丘貞」もあり、その例につながるものと言える。またこうした資料の存在は、文化年間前後に馬瀬において和泉流山脇派の詞章が伝えられる環境があった可能性を示すものとなる。本資料は、馬瀬狂言と和泉流との関わりを考える資料としても重要なものと考えられる。こうした事例を踏まえ、馬瀬狂言の伝承について、更に考察を進める。

最後に、本曲が上演されなかった可能性についても触れておく。まず本曲の上演には荷茶屋が必要とされる。同じ道具を用いる「煎物」も台本は

存在しながら上演記録がない点が共通している。こうした道具類の有無が上演されなかった要因の一つに考えられるのではないか。また本曲の舞台である宇治神明社は、伊勢信仰の広がり、伊勢神宮の神霊が影向し神社として祀られた神明社の一つで、応永頃からその存在があったことが知られる。伊勢から影向した神明の加護が得られず、夫婦の状況は改善されないという結末で終わる本曲の内容から考えると、この伊勢の地での上演記録や他に伝える台本がないことは当然の結果とも推測される。演じられる場所と曲の伝承との関わりについても改めて考えていきたい。

#### 注

- 1 『続 狂言の形成と展開』（瑞木書房・二〇二二）所収。
- 2 この他に『狂言大外、新』がある。
- 3 初出は、『茶道学大系9 茶と文芸』（千宗室監修、戸田勝久編・淡交社・二〇一〇）。その後、注1の『続 狂言の形成と展開』に所収。
- 4 拙稿「馬瀬狂言資料の紹介（10）——「鷹礫」について——」（『学苑』929 二〇一八・三）参照
- 5 拙稿「馬瀬狂言資料の紹介（1）——「狂言番組扣」を中心に——」（『学苑』696 一九九八・三）、「馬瀬狂言資料の紹介（2）——台本に見える上演記録・曲名索引——」（『学苑』703 一九九八・一二）参照。
- 6 資料として使用した台本と台本に関する参考文献は以下の通りである。なお、原文を引用する場合は、適宜句読点を付した。また原文に付されている振り仮名、傍注等は省略した。  
天理本『天理本狂言六義 上・下』（北川忠彦他校注・三弥井書店・一九九四）から引用。参考文献としては、『狂言六義』（天理図書館善本叢書23・24・天理大学出版部・一九七五／一九七六）、「狂言六義全注」（北原保雄、小林賢次

著・勉誠社・一九九二）

和泉家古本『日本庶民文化史料集成 4 狂言』（芸能史研究会編・三一書房・一九七五）

波形本 法政大学能楽研究所蔵の紙焼写真にて確認。

和泉流宗家系狂言本 法政大学能楽研究所蔵『横本和泉流狂言本』

雲形本 雲形本研究会（野崎典子 安田徳子 佐藤友彦 林和利 小谷成子）

「翻刻」雲形本・別編『狂言六議』（二〇一〇）（武蔵野女子大学能楽資料センター紀要）No.10 一九九九・三 から引用。参考文献としては、雲形本研究会

「和泉流狂言台本の比較研究——『雲形本』を中心に——」（『名古屋芸能文化』

3 一九九三・一二）、同「『雲形本』の研究」（『武蔵野女子大学能楽資料センター紀要』No.9 一九九八・三）、佐藤友彦・林和利「和泉流山脇派狂言の

特徴——三宅派との比較」（『楽劇学』5 一九九八・三）、小林賢次「和泉流

狂言台本雲形本と古典文庫本の本文比較——せりふに関して——」（『近代語研

究』12・武蔵野書院・二〇〇四）、同「和泉流雲形本『狂言六議』の本文の

性格について——筆録時期と言語事象——」（『人文学報』351 二〇〇四・二）、

同「和泉流狂言台本雲形本と古典文庫本の本文比較——ト書き・注記に関

して——」（『近代語研究』13・武蔵野書院・二〇〇六）

狂言集成『狂言集成』（野々村戒三、安藤常次郎共編・能楽書林・一九七四）

古川八十番本 法政大学能楽研究所古川文庫蔵『和泉流八十番狂言本』

和泉流密書 国立国会図書館蔵『和泉流密書』（斑山文庫旧蔵）

大蔵虎明本 『大蔵虎明本狂言集の研究 本文篇中』（池田廣司、北原保雄著・

表現社・一九七三）

茂山真一本 『新編日本古典文学全集60 狂言集』（北川忠彦、安田章校注・小

学館・二〇〇一）

古川八十番本の所収曲全てが、和泉家古本と近い関係にあるわけではなく、

曲毎に異なるようであるが、この点については、現在調査中である。

8 注6の雲形本研究会「和泉流狂言台本の比較研究―『雲形本』を中心に―」、佐藤友彦・林和利「和泉流山脇派狂言の特徴―三宅派との比較」参照。

9 注6の雲形本研究会「和泉流狂言台本の比較研究―『雲形本』を中心に―」参照。

10 大蔵虎明本と密書両本の詞章は全く一致するものではない。例えば終曲の、女が追い入りする場面の注記に、虎明本は「ちや屋はくだきてすつる也」としているが、密書にはこの一文はないなど、僅かに違いがある。

11 古川八十番本には、「異本ニ女ヲツキコカス。女腹立、わこりよハ童かさんけをいわしますの、腹立や／＼ト荷茶ヤノ棒ヲ取追込トアレトモ是ハアシ、」という記事が最後に付記されており、この密書に認められる詞章について言及しているものと推測される。

### 【翻刻】

#### 〈凡例〉

一、この本文は、馬瀬文化二年本『狂言六義』中屋豊和氏蔵（所蔵番号 中屋豊和七ノ三）の「今神明」を翻刻したものである。

一、翻刻にあたっては、原則として現在通行の字体を用い、適宜句読点を付した（当て字・反復記号「、」「く」「／＼」は底本のままとした）。また見せ消しの箇所は、補筆訂正された語句を採用した。

一、仮名遣いについては、底本の通りとした。清濁、振り仮名も底本のままである。一、セリフの初めの＼の記号は「」に統一した。役名の記載がない場合は、適宜（ ）で補った。

一、底本における誤脱と判断される不審箇所には「ママ」を付した。

#### 馬瀬文化二年本「今神明」

（シテ）<sup>1</sup>是ハ都方<sup>2</sup>に居住する者て御座る。某色くと商ひを致せ共、とかく不仕合御さる。承われは此比宇治へ神明か飛せられて、きせんくん集をなし賑く敷と申程に、宇治茶商ひ致て見ようとそんする。先女共をよひ出し相談致そふとそんする。是の人居さしまするか。楽屋ヨリ出ル。（女）「わらハをよはせらる、ハ何事て御座るそ。（シテ）「相談する事かある。こふ通らします。（女）「心得ました（シテ）「別の事でもない。今めかし事なれとも、二人ともに情をたせ共とかく不仕合な。そなたハ何とおもわしますそ。（女）「わらハもさふ思ひますれとも、何と仕ふ様も御座らぬ。（シテ）「夫につき此比ハ宇治へ神明か飛せられておひた、しい参しやとゆふ。則爰元からも参りかある。ともかふもするならば夫婦つれてまいりたい物成共、中々其暇てハない。幸の事しや、参りかた／＼商ひをして行ふと思ふか、何とあろふ。（女）「それハいか様ともさせられい。（シテ）「何とそなたも来ておくりやろふか。（女）「童も往てよい事なれハ」（45オ）ゆきませう。（シテ）「某の思ふハ余の事ならふによつて茶を商ふと思ふ事しや。（女）「それハよふ御座ろふか、道具か御座るまい。（シテ）「それハてかさせられた。（シテ）も是にせふと思ふて道具ハ用意しておいた。（女）「それハてかさせられた。（シテ）<sup>36</sup>「なふ追付用意を仕ふほとに先夫にまたします。（女）「心得ました。脇座ニ立ッ。荷をシテ柱ノ向直ス。シテ楽屋へ荷を取ニ行。（シテ）「いさ行ませふそ。（女）「扱く是ハきれいに出来ました。（シテ）「先此立をきさします。（女）「心得ました。（シテ）「さア／＼そなた先へゆかしませ。（女）「心得ました。（シテ）「何とそ神明の御蔭で仕合か仕たい事ておりやる。（女）「夫ハ氣遣さしまするな。定而はんしやうするて御さるふそ。イヤ何かと言中に、宇治へ来ました。（シテ）「誠に宇治しや。扱く聞たよりハ賑くしい事しやなふ。（女）「其通て御座る。（シテ）「扱とこ元か

よかろふそ。いや是かよかろふ。是へよらしませ。(女)「心得ました。脇座二荷を置。笠二ツ棒ニかけておく。女上ニ居ル。シテ下ニ居ル。一是ハ此あたりの者で御さる。承われハ、此比宇治へ神明かふらせられて、願事ハ何にてもかなふと申。何れも同道いたし、参詣いたそふとそんな。なふく御座るか。」(45ウ)(立衆)

「是におります。一右之通言。(立衆)「一段とよ御座ろふ。(立頭)「さあく来さしませ。(立衆)「心得ました。(立頭)「何と思わせらる、そ。神のとはせらる、ハ珍らしい事で御座る。(立衆)「其通て御座る。(立頭)「何事によらず願事か叶ふと申事で御座る。(立衆)「仰らる、通り有難い事で御座る。(立頭)「いや此あたりへ来たれば、殊の外のとかわく。いさはに茶屋がある。何と茶をのみませふか。(立衆)「一段とよ御座ろふ。(立頭)「なふく茶屋、茶をのみませふ。(シテ)「心得ました。先となたも下に御座れ。(立衆)「心得ました。女「さらはこしめせ茶ヲ立テ皆く立衆へ指出ス。皆くへ吞ス。一口ツ、吞ふてわる口言ふ。(立頭)「是ハハわるい茶で御座る。(立衆)「其通て御座る。(立頭)「其上ぬるふてのまれませぬ。(立衆)「扱々わるい茶で御座る。シテ右ノ言ヲ聞テ氣ノトクカル。茶下ヲあおく。色くとする。(立衆)「是はかり茶屋てハ御座るまい。余の茶屋へまいらふ。(立頭)「よふ御座らふ。さアく来さしませ。(立衆)「心得ました。何レモ立ツ。(シテ)「是く何レも茶かわりをおかします。(立頭)「いや愛な者か、吞れませぬ茶をのふたさへはらか立に、何とかわりかやらる、ものしや。(シテ)「茶屋の茶を吞ふて、代りをとらずに居らる、ものか。」(46オ)(立頭)「さアくおくさせられい。立頭へ取つく。(立頭)「扱々にくいやつ。シテココカス。(シテ)「是ハ何とさせらる、。扱々此様な、無躰な事があるものか。(立衆)「あの様にハかまわせらる、な。(立衆)「又外の茶屋へ行ませふ。(立頭)「さアく来さしませ。(立衆)「心得ました。(女)「なふくあふなやのふくけかハさせられぬか。(シテ)「扱々そなたも何として茶碗もきれいにして置ぬ。其上茶もぬるふ成た故の事しや。(女)「童もすいふん大切ニせいを入ますれ共、是と言もとかく仕合のわるさの事で御座る。ナク。(シテ)「実も御主のおいやる通、とかく不

仕合ゆへしや。此上ハいさ京へ登ふ。(女)「それかよふ御座ろふ。(シテ)「余りといへは本意ない事しや。いさ此躰を一ふし謡ふ。(女)「ともかくもさせられい。切謡」(46ウ)

〔付記〕

本稿を成すにあたり、貴重な資料の閲覧のご許可、並びにご高配を賜りました馬瀬狂言保存会会長河原良治氏をはじめ、会員の方々に改めて深謝申し上げます。また資料調査にご高配を賜りました法政大学能楽研究所に深謝申し上げます。

(やまもと あきこ 日本語日本文学科)